



山口大学憲章

(2007年2月15日制定)

はじめに

山口大学は、1815（文化12）年、長州藩藩士・上田鳳陽によって創設された私塾・山口講堂を前身とし、明治・大正期の学制を経て、1949（昭和24）年には、平和と繁栄を願い、地域における高等教育および学問研究の中核たる新制大学として創設されました。そして2004（平成16）年、国立大学法人山口大学が設置する国立大学となりました。

いま、新たな大学づくりに踏み出すにあたり、ここに「山口大学憲章」を掲げ、学生・教員・職員の三者が一体となって、理念の共有と目標の実現をめざします。

I 基本理念

1 「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の創造

私たち山口大学は、21世紀の多様な課題を「発見し・はぐくみ・かたちにする」、豊かな「知の広場」を創り出します。

私たち山口大学は、この「知の広場」において、自らの役割と実績とを不斷に評価しつつ英知の創造をめざします。

2 共同・共育・共有精神の涵養

私たち山口大学は、共に力を合わせ、共に育み合い、共に喜びを分かち合います。この共同・共育・共有の精神を“山大スピリット”として涵養します。

3 公正・平等・友愛の尊重

私たち山口大学は、“山大スピリット”による他者への配慮と自らを律する倫理観のもとに、あらゆる偏見と差別を排し、公正と平等と友愛の精神を尊重します。

II 教育の目標

1 専門性と社会性の育成

私たち山口大学は、地域の基幹総合大学として、各学部・研究科の特性を活かし、個性あふれる専門性と社会性に富んだ人材を育みます。

2 自己啓発・自己研鑽・自己管理の徹底

私たち山口大学は、自己啓発・自己研鑽に努め、自己管理能力を身につけた人材を育みます。

3 知識社会に応える能力の醸成

私たち山口大学は、地域社会および国際社会の発展と平和の実現に貢献するために、21世紀の知識社会における課題探求と問題解決の能力を持った人材を育みます。

III 研究の目標

1 先進的な研究を社会に還元

私たち山口大学は、基礎的・学術的研究および社会が直面する課題の克服と解決に役立つ研究を重視し、総合大学の特性を活かし、先進的かつ長期的な視野に立った研究を進め、その成果を社会に還元します。

2 学際的な研究体制の構築

私たち山口大学は、人文科学、社会科学、自然科学、生命科学などの学問分野の独自性を尊重しながら、これら諸分野の連携を通して、21世紀の時代にふさわしい学際的な研究体制を構築します。

3 研究活動の透明性と説明責任の遵守

私たち山口大学は、研究者相互の交流を基盤に、山口大学を主体とする共同研究体制を構築します。その研究過程と研究成果は広く社会に発信し、説明責任を果たします。

IV 私たちの責務

1 新たな価値の創出

私たち山口大学は、人間と人間、人間と自然、人間と科学とが調和する新たな価値の創出をめざします。

2 社会が抱える問題解決への寄与

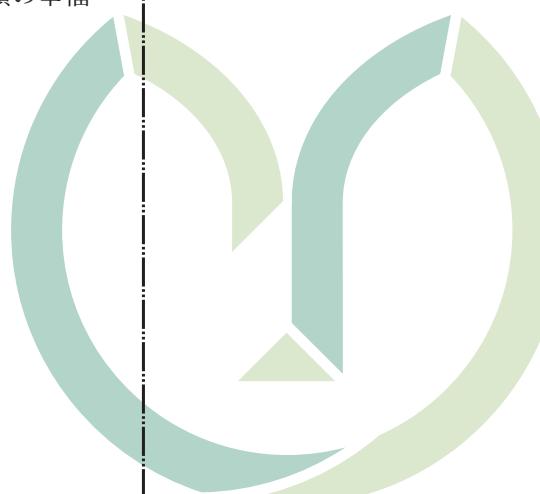
私たち山口大学は、20世紀の時代が繁栄と豊かさをもたらす一方で、自然環境の破壊や貧困・飢餓・戦争など、多くの社会問題が表出した時代であったことを認識し、21世紀の今日にあっては、これらの矛盾の解決のために英知と勇気を役立てます。

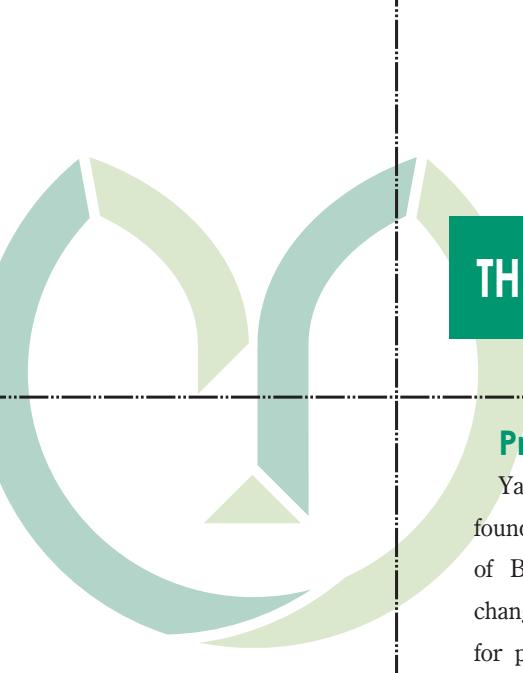
3 地域社会の発展と国際社会への貢献

私たち山口大学は、心豊かな教養人と優れた専門的知識・技術を持った人材を育み、地域社会の発展と国際社会の平和に貢献し、人類の幸福に寄与します。

山口大学は2007年2月15日に大学憲章を制定しました。今後は、この憲章に盛り込まれた理念・目標及び責務を基本として、山口大学の将来30年を見据えた普遍性のある大学づくりを進めています。

次ページに英文の大学憲章、8ページに関連記事を掲載しています。





THE CHARTER OF YAMAGUCHI UNIVERSITY

【山口大学憲章 英文】

Preface

Yamaguchi University has its origins in Yamaguchi Kōdō, a private school, founded by Ueda Hōyō, a feudal clansman of Chōshū Province, in the 12th year of Bunka (1815). Since then, this academic institution had undergone many changes in keeping with the needs of the times. In 1949, it was, in the hope for peace and prosperity, reorganized into a new-system of higher education to become a national university, established as the core for the higher education and research in the region. In 2004 it became a national university institutionalized by the National University Corporation, Yamaguchi University.

Now standing on the threshold of creating a new university, we hoist the Charter of Yamaguchi University, by which we aim to realize the ideals and goals of unity shared by our students, faculty, and staff.

I. Ideals and Goals

1. Creation of a "Place of Wisdom: Discover it, Nourish it, and Realize it"

We, Yamaguchi University, create a "place of wisdom" by addressing a variety of tasks the twenty-first century must strive for: an intellectual forum where we "discover them, nourish them, and realize them."

We, Yamaguchi University, stand in the middle of the "forum" and aim to create intelligence by consistently assessing our own roles and achievements.

2. Fostering the Spirit of Cooperation, Interactive Education, and Sharing

We, Yamaguchi University, work together, interact educationally for each other's personal growth, and share the joy of it. We foster the spirit, the "YU Spirit", of cooperation, reciprocal education, and sharing.

3. Respect for Fairness, Equality, and Fraternity

We, Yamaguchi University, eliminate all the prejudices and discriminations there could be, for the "YU Spirit" shows consideration for others and our ethic regulates ourselves. We hereby hold in great esteem, fairness, equality, and fraternity.

II. Goals of Education

1. Cultivation of Specialties and Adaptability to Society

We, Yamaguchi University, are aware that we are the region's core integrated university. By making the best use of what our faculties and graduate schools excel in, we develop human resources with individually unique specialties and adaptability to society.

2. Dedication to Self-Enlightenment, Self-Development, and Self-Management

We, Yamaguchi University, nurture those talents which will dedicate themselves to self-enlightenment and self-development, thereby becoming harnessed with self-management.

3. Nurturing Human Resources to Respond the Needs of an Intelligent Society

We, Yamaguchi University, nurture human resources capable of exploring tasks and solving problems in the intelligent society of the twenty-first century in order that we will contribute to the development and the realization of peace of both local and international communities.

III. Goals of Research

1. Dissemination and Application of Advanced Research for Social Utilization

We, Yamaguchi University, emphasize the importance of basic and advanced research activities and others that are useful in solving and overcoming the problems society faces. As an integrated national university, we disseminate to society useful knowledge developed from excellent and advanced research activities for long-term perspective.

2. Establishment of Interdisciplinary Research Systems

We, Yamaguchi University, have a high regard for the independence of each individual discipline ranging from Humanities through the Social and Natural Science to Life Science, but organize these into alliances, to establish interdisciplinary research systems best suited for the needs of the twenty-first century.

3. Conforming to the Visibility and Accountability of Research Activities

We, Yamaguchi University, establish a collaborative research base, facilitating the exchange of researchers within and without the University. We fulfill our responsibilities to make research processes and achievements open to public and to make ourselves accountable for them.

IV. Our Missions

1. Creation of New Values

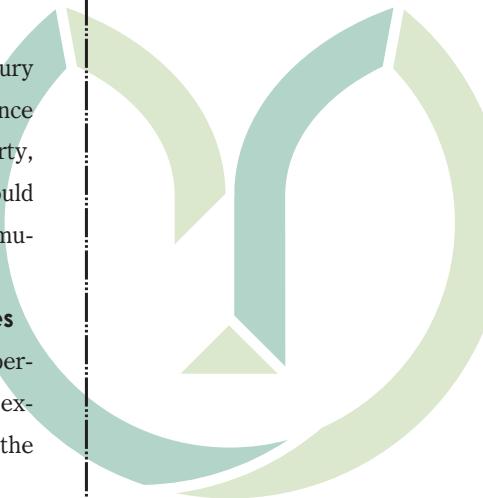
We, Yamaguchi University, strive to develop new values to create the harmonious coexistence of humans and science, and humans and nature.

2. Contribution to Solving Social Problems

We, Yamaguchi University, have the awareness that, whilst the last century has brought about prosperity and abundance, it has also seen the emergence of social problems such as the destruction of nature, and increased poverty, famines, and wars. We take this new century for one in which we should wield the power of the wisdom and bravery that we have striven to accumulate in order to solve those problems that beset society.

3. Cooperation for the Development of Local and International Societies

We, Yamaguchi University, nurture humanitarian and highly-cultivated personalities and human resources. We will develop prominent people with expertise to make contributions to ensure the development of local society, the upkeep of world peace and the well-being of humankind.



特集

法人化4年目を迎えて



丸本 卓哉

学長

略歴

昭和48年4月 山口大学農学部助手
昭和50年3月 同助教授
平成3年4月 同教授
平成8年8月 山口大学農学部長
(平10年7月31日まで)
平成14年4月 山口大学大学教育センター長
(平15年3月31日まで)
平成14年4月 山口大学学長補佐
(平16年3月31日まで)
平成16年4月 国立大学法人山口大学理事・
副学長(教育国際担当)
平成18年5月 国立大学法人山口大学学長
(現在に至る)

平成19年度は勝負の年

はじめに

法人化4年目を迎える本年(平成19年度)は、山口大学にとって勝負の年です。第Ⅰ期の中期目標・計画の後半に突入する年ですが、19年度の年度計画の実施とまとめに加え、第Ⅰ期の全体的なまとめもしなければなりません。さらに、大学評価と認証評価を受ける整理及び準備をする必要があります。これら一連の実績と評価結果に基づいて、第Ⅱ期の中期計画期間における運営費交付金の配分額が影響を受ける恐れが生じています。

運営費交付金配分方法 変更の可能性

本年2月の経済財政諮問会議の4人の委員から提案された運営費交付金の配分に関する競争的配分方法案は、国立大学の教育・研究現場の実態を知らない暴言に等しく、怒りを禁じ得ませんが、今後の成り行きによっては余談を許さない状況が起こるかもしれません。つまり、文部科学省が試算したように国立大学の約半数が運営費交付金が半減することになり、存立できなくなるかもしれないということです。

世界のグローバル化の中で大学の国際競争力を高め、日本が繁栄することを追求するためには、国

際的に活躍できる人材を輩出することが最も大切なことと考えられます。が、国立大学の教育・研究の基盤となる運営費交付金の更なる減額は国立大学、特に中小規模の地方大学や単科大学をつぶすことにつながり、我が国における高等教育の将来、引いては国の将来を誤ることになると思われます。

おわりに

学長として、このような事態にならないように、関係各位に事情を説明するとともに、ご理解をいただき為の努力を全力でしていく所存ですが、教職員のみなさんとも力を合わせて事態の打開を図りたいと念じています。

このように、平成19年度は山口大学にとって勝負の年で、正念場であると理解しています。みなさんのご協力、ご支援の程、宜しくお願いいたします。



村田 秀一

理事・副学長
(企画広報担当)

――略歴――

昭和44年4月 鹿児島工業高等専門学校助手
昭和45年4月 同講師
昭和49年4月 同助教授
昭和57年10月 山口大学工学部助教授
昭和59年4月 同教授
平成6年5月 山口大学工学部長
(平10年5月15日まで)
平成12年4月 山口大学副学長
(平14年5月15日まで)
平成18年2月 国立大学法人山口大学副学長
補佐(特任)
(平18年5月15日まで)
平成18年5月 国立大学法人山口大学理事・
副学長(企画広報担当)
(現在に至る)

問われる大学の在り方と我々の意識

評価への積極的な対応

国家の財源がほとんど底をつき、国そのものが債務の償還に追われているからとはいえ、現在日本の国立大学がかつてない局面に遭遇しています。

この局面を切り開くために、我々は今年「評価」を効率よくこなすシステムを築き、評価を受ける準備をしなくてはなりません。それはYUSEへの入力から始まるとは言うまでもありません。この入力に不満をいうのではなく、「入力」は意識を変えれば自分の活動を記録に残すことと同意義であると思いましょう。毎年の入力をまとめれば自分の大学教員としての足跡がわかれることになります。この効率的な入力方法の改善は必ず行います。教員の皆さん、この評価を嫌わずに飲み込んでしまいませんか。そして、活力ある大学になるように、また山口大学に所属することが誇りになるようにしようではありませんか。

社会からみれば

法人化1期目の中期目標に対するこれまで4年間の評価を平成20年に実施することになっています。その評価結果は、大学自らの組織・業務全般の見直しや22年度からの次期中期目標・計画の検討に資す

るものとするばかりか、次期の2期目の運営費交付金の算定に反映させができるものとなるように行われます。

ステークホルダーは例えば科学研究費の取得額に応じて、運営費交付金を配分することなどを求めてくる可能性もあります。我々からは「そんな無茶な」と思っても、社会からは「当然のこと」あるいは、「国立大学法人は危機感と問題意識が欠如している」とも指摘しています。この意見に反論するためにどうすればいいか考えましょう。

意識をかえよう

山口大学の教育、研究、社会貢献、診療活動の活性化を促すため、法人格を持つ大学の自立性を生かし、我々の意識を変え、規則・規定の改正を恐れず、企画・活動すれば、結果として山口大学の社会・地域での存在意義の向上ばかりか、他大学から羨ましがられる大学になれます。今、大学のあるべき姿を自ら示し、様々な視点に基づく意識変革、意思決定、運営が求められている時と思います。

※ YUSE (Yamaguchi University Self Evaluation) : 山口大学自己点検評価システム



大元 正康

理事・副学長
(人事労務担当)
事務局長

略歴

昭和42年4月 大島商船高等学校
 昭和46年4月 山口大学教育学部
 昭和47年12月 神戸大学法学部
 昭和49年9月 文部省社会教育局視聴覚教育課
 昭和50年7月 同社会教育局青少年教育課
 昭和52年7月 同社会教育局社会教育課
 昭和56年4月 同社会教育局婦人教育課庶務係長
 昭和59年4月 同社会教育局社会教育課総務係長
 昭和63年7月 同生涯学習局生涯学習振興課総務係長
 平成元年4月 山梨医科大学総務部会計課長
 平成3年4月 文部省生涯学習局学習情報課課長補佐
 平成3年6月 同生涯学習局社会教育課課長補佐
 平成7年4月 同生涯学習局生涯学習振興課長補佐
 平成9年4月 琉球大学経理部長
 平成11年4月 徳島大学経理部長
 平成13年4月 独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター基金部長
 平成16年4月 国立大学法人琉球大学理事
 平成18年4月 国立大学法人山口大学事務局長
 平成18年5月 国立大学法人山口大学理事・副学長（人事労務担当）
 （現在に至る）

人事労務をめぐる現状と課題

法人化後の 人事労務運営の現状

法人化に伴い、人事労務の管理運営は、国立大学時代と比べて大きな変化が生じております。

即ち、法令的には、行政機関でないため「定員」という規制はなくなりましたが、人件費管理の観点からの人員管理は必要となっており、職員の任免、給与、勤務時間、安全衛生、災害補償等に関しては、民間企業に適用される法令下での対応が必要となっております。

また、人件費については、運営費交付金が毎年度1%減っていく中での運用が求められます。特に、昨年、「行政改革推進法」が制定され、平成18年度から同22年度までの5年間で常勤職員人件費を5%削減しなければならないことになり、より一層的確な管理運営が求められておりま

中期目標・計画の 確実な執行

人件費の減少は、教員の教育研究活動、学生支援活動、国際交流活動、医療等の諸活動に大きな影響を与える状況になりつつあります。

しかしながら、このような環境にあっても、各国立大学法人に課せられている中期目標・計画の確実な執行は避けて通れません。そうしないと次期中期目標設定時にマイナスからのスタートをせざるを得ないことが想定されます。

本学における人事労務関係業務の取組状況は、「順調に進んでいる」と認識しておりますが、一点だけ気に掛かることがあります。それは、「評価」の分野です。学生や社会一般へのサービスを専ら提供する団体である国立大学法人が何故、評価を受ける必要があるのかという疑問がありますが、法人運営のための経費の殆どは国民の税金や学生の授業料で賄われているからいたしかたありません。要するに、反対給付としての社会に対する説明責任が必要となるわけです。人事評価を行うこともその一環と捉え、自己評価と第三者評価を組み合わせながら適切な評価システムを構築することが課題と考えております。全国の国立大学の取組状況は相当進んでいると聞き及んでおりますので、本学も遅れないようにしておきたいと思っております。ご理解とご協力をお願いします。



事務職員人事評価制度評価者第2次研修の様子



瀧口 治
理事・副学長
(財務施設担当)

————略歴————

昭和47年4月 山口大学経済学部講師
 昭和49年8月 同助教授
 昭和57年8月 同教授
 平成14年4月 山口大学経済学部長
 (平成18年3月31日まで)
 平成18年1月 国立大学法人山口大学副学長
 補佐(特任)
 (平成18年3月31日まで)
 平成18年4月 国立大学法人山口大学理事・
 副学長(財務施設担当)
 (現在に至る)

新たな試練の予兆

「法人化4年目を迎えて」が特集テーマと聞いて、改めて光陰矢のごとしという想いを新たにしています。法人化前2年間も含めると6年になります。大きな制度的枠組みの変更が行われる中で大学構成員全員が半ば暗中模索の状態で対応を余儀なくされてきた6年ではなかったかと思います。

累積的に削減される運営費交付金

この国立大学法人の新たな制度設計の中で特筆されることはもちろん大学運営費の中で約40%を占める運営費交付金の累積的削減システムの組み込みであったことは言うまでもありません。効率化係数△1%とか附属病院収入に係わる経営改善係数△2%はその代表的なものであることは大学構成員の皆さんには既に周知のことであろうと思います。ポイントはそれが累積的であるということです。結果として、法人化4年目を迎えた平成19年度の運営費交付金予算額(ただし、特別教育研究経費・特殊要因経費等の年度固有の財源を除く額)は106億円弱で平成16年度の120億円弱に比して14億円弱の減少となっています。

もともと我が国の高等教育に対する公財政支出の対GDP比率は欧米諸国の2分の1できわめて低い水準にあり、早急な改善が望まれるところですが、厳しい国家財政を理由に、事態は悪化の方向にあります。

限定された大学経営努力

民間企業であれば、収入減に対しては他の収入増で対応することが基本的に求められるところですが、国立大学法人に対して課せられている様々な制約がそれを許さず、財務構造上、支出とりわけ研究費・教育費・人件費削減という限定された大学経営努力を求める仕組みになっているといえましょう。これに耐えることのできない法人淘汰の意図の有無については各法人の判断に任せるといったところでしょうか。

新たな試練?

さて、法人化4年目を迎えるこの時点において本学も含めて多くの国立大学法人が第1期6年間の財政的乗り切りの見通しを持っていたことと思います。しかし、昨年度末の経済財政諮問会議での運営費交付金の配分ルールへの「競争原理」あるいは「成果主義」の導入提言、これを受けた形の財務省による来年度中の試行案提示予告等が相次ぎ、早い時期での何らかのマイナスの影響必至という見方が強くなっています。固い岩盤の上でなくとも活断層の上にない法人作りを急がなければなりません。

試練を乗り越えるべく

財務・施設担当部署のスタッフ全員は、法人が新しい事態の展開に的確かつ迅速に対応できるようになる限りの準備を行っていきたいと考えています。



塚原 正人

理事・副学長
(教育国際担当)

略歴

昭和55年8月 山口大学医学部附属病院助手
昭和60年11月 同講師
平成元年12月 山口大学医学部講師
平成5年12月 同助教授
平成8年4月 山口大学医療技術短期大学部 教授
平成12年10月 山口大学医学部教授
平成14年4月 山口大学医療技術短期大学部 部長（平成15年3月31日まで）
山口大学医学部保健学科長（平成18年3月31日まで）
平成15年4月 山口大学総合科学実験センター長（平成16年7月31日まで）
平成18年5月 国立大学法人山口大学理事・副学長（教育国際担当）
山口大学大学教育機構長（現在に至る）

法人化後の大学教育

大学の現状

日本経済はバブル崩壊からようやく立ち直りつつあります。国立大学法人化後、中期目標、中期計画6年間の折り返し地点に立って由々しく感じていることは、運営費交付金の削減に伴い、教育研究基盤経費が減少し、教員個人の教育研究経費が減っていることです。さらに、3月に経済財政諮問会議の新聞報道がありましたように、運営費交付金に競争原理を導入し、大学の評価に基づいて配分するという、びっくりするようなことが起ころうとしています。この先に見えてくるのは国立大学法人のスリム化および削減による淘汰です。国立大学法人特に中小規模校にとっては生き残りをかけた対策を考える必要に迫られています。教育現場に経済的効率のみを重視した競争原理を導入することには大きな抵抗を覚えます。このような、精神的にも財政的にもゆとりのない状況の中で、私たちにどのようにして実質的な教育をしろというのでしょうか。今や教育は大学にとって聖域ではなくなるとしています。

求められる新たな挑戦

しかし、不満を言い、嘆くばかりでは何も変わりません。山口大学のこれまでの教育実績を堅持しつつ、オンライン的な教育上の特色を広く周知させ、文部科学省の特色GP、現代GPなどの競争的資金を獲得するなどして社会に向けて、山口大学の存在価値をアピールしていくことが重要だと考えます。社会情勢に鑑みながら、私たちは次の6年の中期目標・計画を設定する必要があります。

魅力ある大学へ

教養教育を含む学士課程教育、さらに専門職業人育成、教育・研究能力を持った人材育成を行う大学院教育までの一貫した教育体制の構築が求められています。そのためには、共通教育のあり方、専門教育へのつながり、教養教育の充実、社会の要請に応えることができる人材の育成など解決すべき教育課題はたくさんあります。これらの課題に柔軟に対応するためには、多くの委員会をスリム化し、機動性および責任をもった実践的組織を立ち上げることが大切です。そのための大学教育機構再編案を作成・提案中です。そして、再編によって節約できる人的および時間的余裕を本来の教育現場に戻すことが重要だと考えます。





三木 俊克

副学長

(学術研究担当)

略歴

昭和25年11月 小倉市（現北九州市小倉北区）生まれ。小さい頃は病弱だったが、徐々に頑健になり、大学時代は結構ハードな山登りもしていた。その後の職歴は以下のとおり。
昭和50年4月 山口大学工業短期大学部助手
平成2年10月 山口大学工学部助教授
同教授
その後、地域共同研究開発センター長、工学部長などを務めて、
平成19年4月 国立大学法人山口大学副学長（学術研究担当）
(現在に至る)

法人化後3年を経過して

国立大学の法人化後、はや3年が経過しました。ところで、最近では、本学のみならず、多くの大学が「教育」、「研究」、「社会貢献」を3つのミッションとして掲げています。こうした方針は、「教育基本法」でも、①大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探求して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとすること、②大学については、自主性、自律性その他の大学における教育及び研究の特性が尊重されなければならないこと、な

「研究力の強化」が大学の将来をつくる

どが示されているように、大学の役割として法的にも明確になりました。

本学では、国立大学の法人化後、様々な改革が進んでいますが、別的一面では一種の「閉塞感」も生まれているように思えます。国が措置する運営費交付金の減に伴う基盤的研究費が漸減していることもその一因でしょうし、人員削減が進行していることも原因の1つだと思われます。

大学における研究

そもそも、大学の「人材育成機能」や「社会貢献機能」は、コアとなる「研究力」の上にあるものです。こうした考えを示した図をこの小文にも掲載しておきます。図の詳細な説明は省きますが、「研究」の重要性については、

“学部での卒業研究や大学院での高度な研究を通じた教育こそが大学教育の真髄である”と多くの教職員や卒業生が感じていることとも符合するものです。

国立大学の法人化から4年目を迎えた今日こそ、こうした基本的

な視点に立ち返って、将来の山口大学の姿を考え、具体的な行動に移す必要があると思います。基盤的研究費の漸減を補うには、競争的研究資金や民間資金の導入を積極的に進めねばならないし、学問分野によっては、研究活動における協働（学学連携、産学連携、国際連携など）も有効で、本学ではそれらに関しても、先進的な取組が進んでいます。

このたび、学術研究担当の任を引き受けることになりましたが、将来の競争力を生み出す個々の研究を強化すること、本学に世界的な教育研究拠点を形成していくことなどが重要と考えています。こうしたことを実現するために必要な施策を展開することが小生の責務の1つだと思います。実際には、個々の研究者とのキャッチボールもしながら、大学としての戦略的取組を強化し、学生にとってもプライドがもて、卒業あるいは大学院修了後も、本学で学んで良かったという大学にしていきたい。そんな思いをもちながら、この小文の筆をおくことにします。

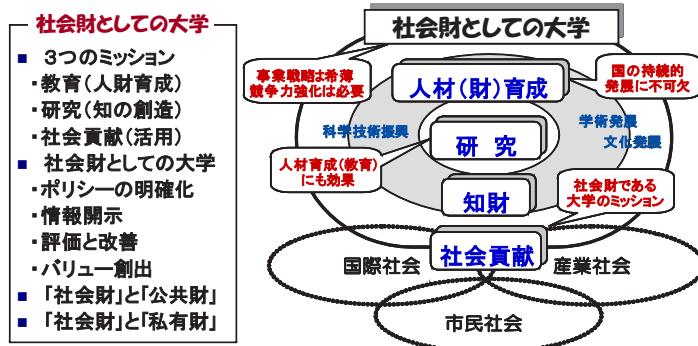


図. 大学のパラダイム転換。「学問の府」から「社会財」へ。「研究」は大学の諸機能を支える“コア機能”であり、競争力の源泉でもある。



福政 修

副学長

(学術情報担当)

略歴

昭和48年4月	京都大学工学部 助手
昭和57年4月	山口大学工学部 講師
昭和58年4月	同助教授
昭和63年11月	同教授
平成15年4月	山口大学附属図書館長 (平成16年3月31日まで)
平成16年4月	山口大学副学長 (学術情報担当) (現在に至る)
	山口大学学術情報機構長
	山口大学学術情報機構図書館長
平成18年4月	山口大学大学情報機構長 山口大学大学情報機構図書館長 (現在に至る)

背景

21世紀を迎えて、IT（情報通信技術）環境においては、コンピュータおよびネットワーク等の急速な技術発展により、学術情報環境においても、学術資料の電子化やデータベース化が普及する中で、学生・教員・職員間での多様な情報流通が可能な状況になっています。

成り立ち

平成15年、附属図書館、メディア基盤センターおよび埋蔵文化財資料館の3施設を、「情報」をキーワードに一元化した学術情報機構として発足し、平成16年の法人化

大学情報機構のめざすもの

- 基盤の整備と提供サービスに基づく大学活性化支援 -

と同時に図書館事務部を学術情報部へと改組して実質的な機構の運営がスタートしました。法人化後、業務運営の推移を見守りながら、学内運営に関する事務情報システムも含めて学術情報機構が中心となって整備・情報化を推進していくこととなり、平成18年4月より大学情報機構と名称変更しました。これにともない、事務組織も情報環境部（情報化推進室を統合し、情報企画課、学術情報課、情報化推進課の1部3課体制）へと再編して再スタートを切り、今日に至っています。

めざすもの

大学情報機構は、山口大学における情報基盤（コンピュータシステム、ネットワーク、データベース等）を高セキュリティ化のもとに総合的に整備します。また、大学の持つ学術情報資産の整備や文化遺産の継承とそれらの提供サービスによって教育・学習、研究および社会連携活動への支援を行います。大学自体、IT武装化を進める必要があり、機構は大学の情報戦略の中心にあるべきだろうと思います。法人化4年目を迎ますが、機構の有機的な動きが明確になってきています。活動の重点事項を、以下の3分野にまとめてみました。

(1) 情報基盤整備とセキュリティの確保

①大学全体のネットワークを含めた情報基盤の整備と安定的維

持、②電算化システムの最適化等の情報化戦略の企画・提案、③情報漏れやウイルス被害に対する情報セキュリティマネジメントシステム(ISMS)の確立とセキュリティ文化の普及。

(2) 教育・学習、研究支援

①電子ジャーナル・各種データベース等の学術情報基盤資料の整備と効率的な検索システムの導入、②e-Learning教材等のデジタルコンテンツの充実支援。

(3) 情報発信・地域連携

①山口大学学術機関リポジトリ(YUNOCA)等の情報発信機能の充実・強化、②貴重資料の展示および地域の文化施設との連携。

今後の展開

大学情報機構の教職員の人達には、『サービス精神旺盛であれ、何事によらず積極的であれ、社会（環境）の変化に敏感であれ、現状に対し問題（危機）意識を持て』と、檄を飛ばしています。機構に課せられた使命を達成するには、大学教育機構や産学公連携・創業支援機構など学内他部局との連携は言うに及ばず、知的探究心旺盛な学生諸君と協働して課題に取り組み、学生・教員・職員が「共育・共同・共有」という本学の基本精神のもと、付加価値の高いサービスの提供を創出していく必要があると考えています。



こうけつ
纈纈 厚
山口大学憲章起草委員
(人文学部 教授)

山口大学憲章の制定にあたって

いま、なぜ山口大学憲章か

法人化されて4年目を迎えた山口大学は、いま新たな役割が求められています。法人化前の国立大学は必ずしも建学の精神が重視されず、入試実績や教育研究業績など数値に示される基準の差異が、その大学の有り様を示す指標がありました。しかし、法人化後の国立大学は、新たな建学の精神を高らかに掲げ、そこに込められた目標や理念の実践を通して高等教育機関としての使命を果たし、広く社会に貢献することが期待されています。そのため、私たちの英知と情熱を結集して、憲章を制定したのです。

すべての「山口大学人」 が誇りと喜びを

山口大学憲章は、私たち山口大学で学び、働くすべての者が共有するものです。この憲章を通して、私たちは「山口大学人」としての誇りと喜びを分かち合うことができるのです。憲章では、それを“山大スピリット”と命名しています。同時に、憲章は「山口大学人」ではない他大学や他地域、さらには世界全ての人々とも、様々な差異を超えて力強く繋がっていくことの大切さを強調しています。教育研究の成果を地域社会や国際社会に還元していくことは、21世紀の時代を生きる私たち「山口大学人」にとって、極めて重要な課題となっています。憲章は、そのことを深く強く意識したものとなっています。

憲章を活かす不断の努力を

憲章は、ただ単に掲げるものではありません。私たち「山口大学人」が、これを活かす不断の努力をなすことが重要だと思います。そして、実践のなかで憲章に新たな息吹を吹き込み続けること、それが山口大学をより充実した個性溢れる大学へと導くのだと信じます。憲章をお読み頂ければお分かりのように、憲章の文言は決して具体的な実践目標を示したものでも、ことさらに他大学の憲章と異なる個性を強調したものでもありません。また、個性を発揮することに重点を置いて起草されたものではありません。それは、大学という教育研究機関が原理的に同質の社会的使命を担っていることから、真剣に大学のあり方を理念的に追求すると似通ってこざるを得ないのです。この憲章の理念や精神をベースにして、山口大学では今後、より実践的かつ具体的な実現目標である山口大学像（マスター プラン）などが検討されていくことになります。確固不動の山口大学像などを構築していくためにも、実は憲章という支柱が不可欠に思います。言うならば、山口大学憲章とは、山口大学像などを生み出す“母”なのかも知れません。憲章作成に関わった一人として、この憲章がこれから長きにわたり、親しまれていくことを切に願っています。

学内連絡先
TEL : 083-933-5278
E-mail : koketsu@yamaguchi-u.co.jp

いま「おもしろプロジェクト」がおもしろい！

～おもしろプロジェクト‘06報告会と‘07審査会から～

植村 高久

教授 経済学部（元・学生支援センター長）



「おもプロ」ってご存知ですか？！

まず、「おもプロ」とは何かからお話するべきでしょう。



「おもプロ」のロゴ

「おもしろプロジェクト」は学生企画を資金支援する取組です。特徴は学生が自ら実施する自主的・創造的企画であれば、（卒業研究や研究室の（先生の）研究テーマは除くという制限はありますが）企画の内容を

限定しない間口の広さと、50万円程度という支援金額の多さにあります。1996年度に廣中学長（当時）の提唱で開始され、今年で12年目を迎えます。この間に280件の応募があり、毎年10数件程度、合わせて135件が採択されました。

「おもプロ」が目指すのは、参加者に思う存分企画に取り組み、かけがえのない体験をしていただこうということです。したがって、企画が社会的に有用かどうかは重視されず、学生らしい‘アイデア豊かな’（突飛な）企画も大歓迎です。さらに「失敗してもいい」が当初からの基本精神で、企画の成否を競うものではありません。

「おもしろプロジェクト」の 素晴らしさとは？

このような実に簡単な仕組みながら、「おもプロ」は豊かな実りをもたらしつつあります。「おもプロ」は参加者には大変好評です。報告会でのアンケートでは、参加者の97.7%が「参加して良かった」、同じく97.7%が「他では得難い体験ができた」と回答しています。これは一方では、自分の夢が実現できるという「楽しさ」に由来するものです。しかし、「おもプロ」は楽しいだけではありません。ほとんどの参加者は企画を実現するための様々な困難にぶつかりながら、それを克服しようと懸命に努力しているのです。「おもプロ」に選ばれた限りは企画を実現する責任があり、それを動機にして必死で取り組む。それが、サークル活動などとは異なる「他では得難い体験」につながる。学生の自発性・意欲を引き出し、充実感を与え成長を促すことができていることが「おもプロ」固有の成果です。参加者の感想にも「学長の暖かい支援に励まされた。良い大学に入れて幸せだと感じた」とか、「これからも山口大学の特色であってほしい」など素晴らしさを裏付けるものが多数あります。

「おもしろプロジェクト‘06」報告会

報告会は2月21日、丸本学長、塙原教育国際担当副学長が出席され、和やかな雰囲気の下開催されました。時期の制約で多くの参加者は期待できないものの、今年は報道機関なども来られていて華やかでした。各プロジェクトが活動報告のプレゼンを行い、その後質疑応答という単純な形式でしたが、13件の報告内容はどれも学生らしく個性が際立っていて、時間はあっという間に過ぎてしまいました。

「おもプロ」報告会の素晴らしいところは、大学への感謝に満ちていることです。上述の素晴らしい体験が大学の支援なしにはあり得なかったという参加者の気持ちがひしひしと伝わり、学長・副学長も温かい眼で学生に声を掛ける。ここには‘良い大学’の一つの姿があります。

‘06年度の企画の特徴は「大学のためになる企画」の多さです。携帯で見られる「休講掲示板作成」や駐輪問題、学内環境問題への取組、さらに大評判だった「山口大学まんじゅう」の商品化など、大学を良くしようという志向を持つ取組が多く見られました。また、障害児向けのおもちゃの作成など優しさが伝わる企画やソーラーカーなど工夫と努力が感動的な企画もありました。企画の成否はともかく、みんな企画に真剣に取り組んでいて、「今の学生も結構やる」という強い印象が残りました。



報告会の様子

「おもしろプロジェクト ‘07」審査会

3月16日に行われた審査会は、報告会とはうって変わって緊張した雰囲気に満ちていました。20件の応募企画が次々にプレゼンを行い、その後審査委員との質疑応答です。どれも個性があり、またプレゼンも工夫がなされていて、「やる気」と真剣さが伺えるものが大半でした。また、厳しく率直な審査委員の質問や要望に一生懸命応えようとする学生の姿は普段は見られない感動的なものでした。結果として、13件の企画が「おもしろプロジェクト ‘07」として選定され、4月から新たにスタートします。

「おもプロ」の真実は、参加してみないと分かりません。学生諸君、何かやりたいことがありますか？その夢を「おもプロ」を通じて実現してみませんか？



商品化された山口大学まんじゅう

※「おもしろプロジェクト」については、山口大学Webページ (http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~kouseika/ssc/layer2/ssc_big01shien_mid08omopuro.htm) からご覧いただけます。

学内連絡先 学務部学生支援課 TEL : 083-933-5148 E-mail : ga116@yamaguchi-u.ac.jp

教員養成GP 第2回「ちゃぶ台フォーラム」報告

教育学部ちゃぶ台ルーム運営委員会

教育学部が平成17年度から取り組んできました教員養成GP “「ちゃぶ台」方式による協働型教職研修計画”を総括し、今後の方向性を考える場として、3月2日（金）から2日間、第2回「ちゃぶ台フォーラム」を開催しました。このプロジェクトでは、「教員になりたい」、「教職を学びたい」という高い実践意欲を有した学生に焦点をあて、教職実践の場だけではなく省察の場も提供し、これらの場を支援する組織、そしてプロジェクトを運営するシステムを作り上げることを目標に活動を展開してきました。

初日（3月2日）のフォーラムは、「ちゃぶ台ルーム」にて、山口県教育委員会、高知大学、香川大学の先生方、学部学生、小学生の保護者など約50人に出席頂き、パネル・ディスカッション “協働型教職研修の成果と可能性をめぐって”を開催しました。開会行事では、山口県教育庁義務教育課今鶴教育調整官にご挨拶を頂き、岡村吉永准教授が本プロジェクトの事業報告を説明しました。その後のパネル・ディスカッションでは、「小学校チユーター事業」、「フレンドシップ事業（生雲小プロジェクト）」、「学力向上等支援員派遣事業」、「現場教師と話そう等ちゃぶ台研修事業」、「ちゃぶ台林間学校事業」の5つの

“ちゃぶ台”が作られ、各事業の成果や今後の可能性が話し合われました。各ブースには、学生や大学教員はもちろん、平川中学校、大殿中学校、鴻南中学校、国立山口徳地青少年自然の家の先生方、保護者・地域の方などにも加わって頂き、中身の濃い省察が行われました。省察の後、各ちゃぶ台の代表学生から、次のような発表がありました。

- ・授業への参加、公開授業ではTT(Team Teaching)として加わるなど一歩進んだ実践体験をしている。
- ・事業に参加した学生同士が仲良くなれ、卒業後も相談、切磋琢磨できる友人になれた。
- ・実践活動に参加した成果として、教員採用試験のレポート試験や面接試験において、子どもや生徒との関わりの経験が活かせた。

- ・事業の方向性として、保護者や地域の方々とも関わっていきたい。
- ・活動を総合演習の一科目に位置づけるなど正規の単位科目として認定して欲しい。
- ・事業を長く続けるために、学校・学生双方から要求を言い合うことが大切ではないか？
- ・ちゃぶ台ルームに学生が来てくれるための具体的な方法を考えた。
- ・参加者を増やすために、学生の休業中に実践活動体験ツアーを組んだらよいのではないか？
- ・学生委員として、「掲示物を貼る」など積極的に活動して、ちゃぶ台を盛り上げたい。
- ・現場の先生から、「授業や部活動への参加、学生が生徒に自分の体験談を話すことなどの学生の活動が、先生と生徒をつなぐ役割になっている」と報告があった。
- ・保護者から、「このような事業で一生懸命の学生さんを見ると安心する。子どもの個性を大切してくれる教師になってほしい」という発言があった。
- ・教育機関の指導者から、「体験学習で発想を実現できる力と臨機応変さをもっと学んでほしい」という発言があった。

二日目（3月3日）は場所を「ホテル松政」に移しまして、俳優の原田大二郎氏を講師としてむかえ、ラウンド・テーブル “「音読」のもつ教育力～原田大二郎とつくる朗読の時間”を実施しました。参加者は、教育学部の学生、教育学部附属光中学校の生徒、山口県内の学校教員、大学関係者を含め約70人であり、丸本学長、瀧口財務施設担当副学長にもご臨席頂きました。ラウンドテーブルは、「山口大学教育学部は身内にお世話になった人間が多い自分にとっては、ふるさとみたいな存在で、実は山口大学教育学部で朗読を教えることが俳優としてのボクの夢だった…」という原田講師の挨拶ではじまり、日本における幕末の識字率と寺子屋の貢献、音読の教育的効果。そこから現今日本の学校教育における

朗読の少なさへの危惧、さらに、某県立総合高校での朗読指導の経験から「詩の朗読が学生たちにもたらすエネルギー、それがもたらす新しい世界（表現、創造）」を体験すること、特に、教育学部の学生にそれを味わって欲しいことが語られました。ご挨拶の後、吉田学部長、岡村准教授が舞台に登壇し、原田講師を含めて3人の鼎談スタイルで、レッスンが展開されました。休憩の後、教育学部附属光中学校の生徒や教育学部の学生が朗読の指導をして頂きました。そこでは、読みのテクニック、韻文と散文の読みの違い、さらには、姿勢（遠くまではっきり伝えるには、くるぶしと骨盤、頭がい骨の関係を保った上で発声することが大切）についてまで、個々の生徒や学生に応じた指導が展開されました。最後に原田講師の朗読が行われ、3時間にわたるラウンドテーブルが終了しました。

今回のラウンドテーブルを振り返って見ると、原田講師、舞台にあがった19人（吉田学部長、岡村准教授、中学生9人、大学生8人）と、会場の受講生を含めた74人が創り出した、「舞台上演」だったのではないかと思われます。この舞台を通して、詩の聴講者、音読や朗読の学び手、教え手、ファシリテータ、演出家（演じ手）、教員養成を担う者、「ちゃぶ台」の持つ可能性を模索する者などの観点から、様々な「学び」ができたのではないかと考えられます。



今鶴教育調整官のご挨拶（初日）



原田大二郎氏による大学生への朗読指導（二日目）

特に、原田講師の一つの発言の裏側には多くの知識や理論があり、物事の本質を捉えた上でテクニックと結び付けていることなど、教員を目指す学生にとつてはこの舞台から学ぶべきことは多かったはずです。さらに、今回の舞台上演「原田大二郎と74人」を「ちゃぶ台ルーム」に置き換えたとき、我々は「ちゃぶ台ルーム」や「ちゃぶ台」の持つさらなる可能性を感じることができた時間になったのではないかと思います。

「卓袱台」を広辞苑で引きますと、その意味として、『4脚の低い食事用の台。飯台。食卓。』と書かれています。いつしか第二項として、『立場や地位を越えて人々が集まり、本音で話しあう場。協働で課題解決の糸口を探しあったり、互いに力を高めようとする場。山口大学教育学部では「ちゃぶ台方式」として教員資質向上の場として利用されている。[例]「ちゃぶする」。「ちゃぶ台ルーム」において、教職関係の話し合いや打合せに参加すること』が書かれることを目指して、今後も引き続き、活動を「細く長く」展開していきたいと思います。

最後になりますが、2年間にわたり、本プロジェクトをご支援、ご協力頂きました学内外の関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

（文責：鷹岡亮 [教育学部准教授] TEL : 083-933-5460）



事業毎のちゃぶ台話し合い（初日）



原田大二郎氏（前列右から3人目）、
丸本学長（前列右から2人目）、瀧口副学長（左から3人目）、
スタッフとの記念写真

山口大学進学説明会 スプリングセミナーに250人が参加

田中 均

准教授 大学教育機構 アドミッションセンター



6会場に250人が参加

3月22日（木）の東京会場を皮切りに、23日（金）大阪、26日（月）下関、27日（火）広島、28日（水）山口、29日（木）博多の6会場で「山口大学進学説明会スプリングセミナー」を開催しました。本年度は新たに大阪に会場を設け、工学部の地方会場試験実施とともにうるま地区の入試広報活動を行い、合計で約249人の高校生、先生や保護者の方々に参加いただきました。

熱心な高校生 学生も活躍

セミナーではアドミッションセンター教員から、山口大学の理念と目標、特色ある教育活動、学生生活や進路・就職支援などについて説明があり、その後文系、理系の会場に分かれ各学部教員から学部説明を行いました。また、個別相談ブースでは各学部の個別相談と合わせ、学生による「学生生活なんでも相談コーナー」を開設し、多くの高校生が大学生活について熱心に話を聞く姿が見られました。今回のセミナーでは司会・誘導・受付など多くの場面を山口大学生が担当し、「学生中心の山口大学」をアピールしました。

参加者からの声

参加者は高校の先生の勧めやチラシを見ての参加が多く、宿泊を伴つたり2時間以上かけて参加したりする高校生もいました。個別の相談の中では教育内容や選抜試験の方法、資格や免許、専門分野の内容を尋ねる高校生が多く見受けられました。参加者からは次のような感想が寄せられました。

- ・「少人数でとてもわかりやすく説明してくださった。質問しやすい雰囲気と現役の学生の方の話も聞けてさらに興味を持つことができた。大学のことだけでなく、山口県のことも話してくれて受験するまでに一度は行ってみたいと思った。」
- ・「以前からホームページなど拝見させていただいていましたが、自分の行きたい学部は自分のやりたいことができるのか、など、ホームページだけではわからなかった部分がわかってよかったです。」
- ・「昨年の夏、オープンキャンパスにも行きましたが、山口大学の雰囲気がとても好きです。」
- ・「先生や先輩の話が聞けてよかったです。また、自分の受験勉強に対するモチベーションも高めることができました。」
- ・「山口大学の新しい情報が聞けてよかったです。遠くから来たかいがあった。」

これからも山大とコミュニケーション

アンケートを行い、そのなかで、スプリングセミナーを機にこれから山口大学とのコミュニケーションを図るために望むこととして、大学に行って大学見学や研究室訪問をしたい、山口大学の学生の話を聞きたいなどが挙げられ、これから山口大学の情報を得る場合、ホームページ、大学案内や大学の発行物、オープンキャンパスや大学訪問などに期待する声が寄せられました。



個別相談：自分の知りたいことがよくわかった！



学部説明：大学ではこんなことを学ぶ

入試に関するお問い合わせ先

学務部入試課

TEL : 083-933-5153

<http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~nyushi/>

学内連絡先

TEL : 083-933-5048

E-mail : ac.tnk@yamaguchi-u.ac.jp

山口大学新技術説明会を開催して ～産学連携コーディネータの重要性の観点から～

數 達己
学術研究部 産学連携課長



はじめに

産学公連携・創業支援機構は、3月9日（金）東京市ヶ谷JSTホールにおいて新技術説明会を開催しました。

新技術説明会は、科学技術振興機構（JST）の事業のひとつで、JSTから開催に必要なリソースの提供を受け、大学の研究者が自身の発明を自ら企業関係者を対象に、技術説明を行うとともに、企業からの具体的な技術相談にもその場で対応し、研究成果の実用化促進を目的として、広く実施企業を募るものでした。

説明会では、「アグリ（農業）」、「医療」、「電気・通信」など6分野、10件のテーマについて1テーマあたり約20分間の発表後、研究者と産学連携コーディネータを交えた企業との技術相談も行いました。また、発表会場入口では、パネル展示による本学の産学連携活動や（有）山口ティー・エル・オーの技術移転に関する取組事例も併せて紹介しました。

重要な産学連携コーディネータの役割

説明会開催にあたっては、「産学連携コーディネータ」や「特許流通アドバイザー」^(注1)が非常に重要な役割を果たします。

本学には、常盤地区に4人、東京地区に1人の非常勤コーディネータ、加えて、山口TLOにも特許流通アドバイザーやNEDOフェロー^(注2)の方々が配置されています。このコーディネータの方々が、昨年10月から約5ヶ月間もの長期にわたり、通常業務を超えた入念な打ち合わせや準備作業されました。おかげで、当日の説明会への企業等の参加者は、250人を超える予想を大きく上回る結果となりました。さらに、技術相談件数も40数件を数え、その中で共同研究等のマッチングに繋がりそうな案件も相当数あり、主催者であるJSTからも他大学にない高い評

価を受けています。

すでに、当日の参加企業数社から実用化に向けた共同研究についての申し込みがあり、まさに、産学連携コーディネータの「熱意とセンス」が見事に花開いた説明会であったと言っても過言ではありません。「コーディネータが動けば、産と学の距離が縮まる。」

今後のフォローアップ

大学の研究成果は、企業等を通して実用化されて初めて「社会貢献」となります。

今回の説明会でコンタクトした企業等とは、今後さらに発表者と機関が連携して、強力にマッチング活動を進めていき、最終的には産・学両者において「Win-Winの関係」が形成されることを望んでいます。

(注1) 特許流通アドバイザー

円滑な特許流通の拡大と普及を図るため、大学・企業間などのさまざまな特許や技術の移転・活用をサポートする専門家。(独)工業所有権情報・研修館が行っている「特許流通促進事業」で、平成18年度は2人が山口TLOに派遣されている。

(注2) NEDOフェロー

(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）が行っている、「産業技術フェローシップ事業（技術者養成事業）」のひとつで、産業技術に対して幅広い視野と経験を有し、技術シーズを迅速に実用化につなげていくことができる優れた産業技術人材の養成を目的として、TLO等の産学連携機関が受け入れている養成技術者で、平成18年度は5人がNEDOから山口TLOに派遣されている。



テーマ発表の様子



発表会場入口ホールでのパネル展示

学内連絡先

TEL : 0836-85-9959

E-mail : sh057@yamaguchi-u.ac.jp

知財担当者、产学連携・TLO関係者、研究者のための知財集中研修会

加納 好昭

産学公連携・創業支援機構 知的財産本部 ディレクター



開催状況

3月16日（金）、山口大学常盤キャンパス（工学部）において、「知財担当者、产学連携・TLO関係者、研究者のための知財集中研修会（一日で身につく知財・契約の基礎から応用まで）」を開催しました。本研修会は、文部科学省が実施している「大学知的財産本部整備事業：地域連携ネットワーク事業」の一環として文部科学省と本学との共催によるもので、昨年12月に開催しました「知財アカデミアin山口」に続き、今回で4回目を数えます。

今回の研修会では、特に大学知的財産本部整備事業や产学連携業務に携わる方々に向けて、知的財産権の取り方や契約の基礎から応用までを取り上げました。

研修会には、北は北海道から南は鹿児島県まで、大学・企業・公共機関等学外者約75人、学内からは杉原学術研究担当副学長（当時）をはじめ約45人の参加を得て開催されました。

プログラム

第1部の「知的財産セミナー」では、前段で文部科学省 研究振興局 研究環境・産業連携課 技術移転推進室の吉田 秀保室長補佐から、基調講演「产学官連携の現状と今後の施策について」と題して、現在の产学官連携の状況と今後の国の施策や文部科学省の行政等について、大所高所の観点からご説明いただきました。

後段で山口大学 産学公連携・創業支援機構 知的財産本部の佐田 洋一郎本部長が、①知的財産の基礎から特許取得のノウハウ、②強い特許の創出から共同研究時の知財取扱いの注意点、③研究成果の守り方から特許経費の節減のノウハウ等、特許取得のノウハウや特許経費の節減方法等についてわかりやすく解説しました。

引き続き、第2部の「契約セミナー」では、山口大学 産学公連携・創業支援機構 知的財産本部の奥登志生ディレクターが、①知財契約の基礎知識、②产学間での知財契約上の注意点とその対応策等、知財契約上の注意すべき点を中心として現場で直ちに役に立つ知識についてわかりやすく解説しました。

意見交換・交流会

研修会の最後に、会場との意見交換が行われ、当日会場から回収した多くの質問に対して、吉田室長補佐、佐田本部長、奥ディレクターの講師陣が丁寧に回答、アドバイス等を行いました。

また、本研修会で恒例となっているプログラム中盤の「ミニ交流会」では、熱の入った情報交換が参加者間で活発に行われ、研修会終了後の交流会では、杉原学術研究担当副学長も交え、各大学の取り組みや悩みについて「本音の話」に花が咲き、閉会予定期刻を超える盛況ぶりでした。



杉原学術研究担当副学長（当時）による開会挨拶



佐田知的財産本部長によるセミナー

学内連絡先

TEL : 0836-85-9966 FAX : 0836-85-9967
E-mail : ykanoh@yamaguchi-u.ac.jp

改装して新しくなった共通教育棟

河田 徹也

施設環境部 施設企画課長補佐

学生支援機能の充実

高機能で安全・安心な教育研究環境の創造を目指し、老朽改善、耐震性の確保およびスペース機能の改善を行った共通教育棟の大規模改修工事は、平成17年8月から約2年の歳月を経て、平成19年3月に完了しました。

本学の共通教育の目標である「主体的な学習意欲に基づいた基礎学力および課題探求能力等の向上」を実現させるため、学生が主体的に学ぶことのできる学習支援スペースの拡充整備が強く求められていました。そこでこの改修整備では、情報ラウンジ、語学対応自習室などの学習支援スペースを新たに設けるとともに、5つのセンター（大学教育センター、アドミッションセンター、国際センター、学生支援センター、エクステンションセンター）を集約し、さらに、パソコン操作の不慣れな新入生をサポートするパソコンSOSピアサポート室や、就職活動を支援する就職支援室および談話室等の支援スペースとコミュニケーションスペースをより広く確保するなど、共通教育全般の学生支援機能の一層の充実を図りました。

施設機能の整備

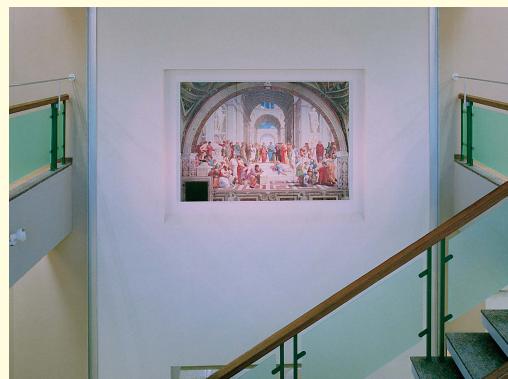
また、講義棟前庭には、大学祭等の諸行事に対し、活用可能なステージや大屋根を設置して、学園生活に潤いと活力の場を提供しています。



コミュニケーションルーム

設備面では、照明や空調機の電源を居室の電気鍵と連動させた不在時の消し忘れ防止装置や、氷蓄熱式マルチパッケージ空調方式等の高効率の省エネ機器を採用するなど、地球環境にも配慮した整備を行いました。

これらの諸整備により、教育環境の向上とともに、共通教育における学習指導、生活指導および人材養成等、今後の支援体制の充実と発展が期待されています。



共通教育講義棟ホール



共通教育講義棟外観

学内連絡先
TEL : 083-933-5123
E-mail : si074@yamaguchi-u.ac.jp

キャンパスベンチャーグランプリ中国

池田 周平

大学院農学研究科 生物資源科学専攻 2年



キャンパスベンチャーグランプリとは、大学・大学院・専門学校・高校などの学生を対象として、ビジネスプランなどを提案するコンテストです。今回私は、この大会で中国地区の大賞を受賞しました。

今回受賞したテーマの概要は、スギ花粉サプリメントの製造とその販売方法のビジネスプランです。

この、スギ花粉サプリメントとは、スギ花粉症の原因物質であるアレルゲンタンパク質に対して、多糖修飾という特殊な処理をすることで弱毒化したものであり、アレルギー患者がこれを飲んでもアレルギーを起こさないことが確認されています。これを飲むことで体がこのアレルゲンに慣れ、再度花粉が体に入ってきてもアレルギー症状が起きなくなるという経口ワクチンです。

この原稿を書いているときに、「パピラ」というスギ花粉そのものを商品化しているものを飲んでアナフィラキシー（重いアレルギー症状）を起こした患者についてニュースで報じられました。私たちの経口ワクチンはアレルギーを起こす部位をマスクすることによって完全に弱毒化しており、安全性は確認されています。ワクチンとは、微生物やウイルスを加熱処理などで完全に弱毒化したものを注射したり、経口投与したりするもので多くの病気に用いられています。

この、サプリメントは私の指導教官である加藤昭

夫先生が研究・開発され、昨年退官を機に大学発ベンチャーの起業を準備されています。今回の大会では、サプリメントの効果や製造・販売方法などのビジネスプランを考え発表しました。

この大会には、昨年の大会から出場しており、そのときは優秀賞を頂きました。前大会の不足した点などを改善し、今大会に臨み「中国地区大賞」を受賞することができました。さらに、3月に各地区の大賞を集めた全国大会にも出場しました。そこでは、他校のビジネスプランと比べ甘かったこともあり、賞を頂くことはできませんでした。しかしながら、大会を通して、普段は実験や研究などを主に行っておりますが、それとはまったく別の分野である製造や販売・経営・などの普段触れることができないところに触ることができ、直面する幾多なる課題を克服していくことによって、これから的人生の糧となる非常に貴重な体験をすることができました。

今回の受賞は、加藤先生をはじめ、先輩方の日々の研究があってこそ受賞することができたのだと思います。私は、運よく発表する機会をいただくことができ、非常に感謝しております。今後は、スギ花粉症に苦しんでいる方々のために、このサプリメントを早く世の中に出せるようがんばっていきたいと思います。



花粉サプリメントの試作品

私の研究



齊田 菓穂子

講師

大学院医学系研究科 保健学系学域



研究室の学生とともに（筆者：左奥）

がん患者・家族を対象とした私の研究

がん看護との出会い

人々が長生きをするようになり、また、食生活の欧米化により、がんの発生死亡数は、1981年には国民の死亡原因の第1位となりました。現在では約3人に1人の方ががんで亡くなられる状況です。

私の看護師としての最初の職場は、放射線科病棟でした。そこでは、2日に1人の割合でがん患者さんが亡くなり、その現状に対し看護師として何もできないことを苦痛に感じ、病棟に行くのが億劫になっていました。今考えると、バーンアウトしていたように思います。その後、異動でがん患者さんと出会うことが少なくなり、しばらく、がん看護から遠ざかっていました。

しかし、数年後、がん看護を考える場面に出会うことになりました。知人の友人が30歳代でがんになったのです。その方は医療関係者だったのですが、病名告知をされず、痛みなどの身体的苦痛が十分に緩和されないことや自由に動くことができないことで、家族や知人に感情をぶつけ、知人は困惑していました。その姿を間接的にみながら、患者本人は医療関係者

だから、病名や病状を隠していてもわかるのに、なぜ告知しないのだろうか、たぶん、本人は悪い病気だと気づいていたと思うのですが、本当のことを知らされることによるどうしようもない自分の感情を家族や友人にぶつけていたのではないかと思いました。また、苦しみながら「死」を迎えたことは家族にも大きな傷が残ったのではないかと思います。このことが、がん看護をもう一度勉強しようと思ったきっかけでした。

がん患者及び家族のQOL (Quality of Life) 向上へのサポート

2006年6月にがん対策基本法が成立し、今年（2007年）の4月から施行されています。山口大学医学部附属病院も今年の1月31日にがん診療連携拠点病院に指定されています。この基本法では、私たち医療者には①がん予防に関する啓発活動、②がん検診に関わる医療関係者の研究などによる検診の質の向上、③がん専門医の育成、④緩和ケアなどがん患者の療養生活の質の向上、⑤患者・家族への相談支援、などが義務付けられて

います。

私は、がん患者・家族のQOLの維持・向上への支援を研究のテーマにしています。ひとつは、がんの治療、特に化学療法からくる副作用への対処（サポート）です。現在、外来で化学療法をすることが多くなっており、脱毛に対する訴えが強く女性診療外来でかつらの相談・紹介を行っています。また、乳がん患者や腹部の手術、化学療法、放射線治療によって、上肢や下肢にリンパ浮腫が出現するなどボディイメージの変化によるQOLの低下がみられます。このたび、リンパ浮腫軽減・予防のために医療リンパセラピストを取得しましたので、リンパ浮腫の患者のサポートおよび研究をしていく予定です。

もうひとつは、がん患者及び家族がより良い終末を迎えるための研究です。

今後もがん患者および家族にエンパワーメントしていく研究を続けていきたいと思っています。

学内連絡先

TEL・FAX : 0836-22-2855

E-mail : naho@yamaguchi-u.ac.jp

私の研究

鍋山 祥子

准教授

経済学部 経済学科



2006年夏、研修先のデンマークでお世話になったHansen夫妻と筆者（中央）

日常生活を学問する

研究の第一歩：アイデンティティと自己他者関係

私が「学問」の魅力にはまったのは大学生のとき。社会心理学を専門とする先生のゼミに入ったのがきっかけです。ゼミで勉強するうちに、小さい頃から人間関係について自分なりに考えてきたことや、私らしさって何なんだろう？というような日常生活で感じてきた疑問が、「学問」として既に分厚い専門書になっている、ということを知ったのです。そして、それまでの人生の集大成として「状況の定義と自己の定義－仮面の解釈学的考察－」というタイトルで卒論を書きました。このときの中心テーマであるアイデンティティ（自分は何者かという自己定義）は、今でも私の研究の中心テーマであり続けています。

ケア論から地域福祉 (高齢者福祉) 論へ

大学卒業後しばらく企業で働いていましたが、そこで、大学生のうちは気付かなかった社会の仕組みや企業社会におけるジェンダー（文化的社会的性差）構造の存在を身を以て知りました。そして、

企業人ではなく、研究者として社会を考えるという道を選択し直したのです。大学院では社会学を専攻し、アイデンティティとジェンダーと近代化との結びつきをテーマとした「共依存 (Co-dependency) の社会学的考察」を修士論文として著しました。共依存とは、他者から必要とされることで自己の存在証明を得ようとし、他者に自己犠牲的献身をしてしまうという自己他者関係のことです。

次の博士課程では、高齢化に伴う社会構造の変化に着目し、超高齢社会においてケアが必要な人に誰がどのようにケアを提供するのか、という問題について社会政策をテーマに研究に取り組みました。社会が必要としている高齢者ケアと共依存的なケアとの相違点を明らかにしたいという問題意識があつたからです。時はまさに公的介護保険制度への移行時期でした。福祉サービスの実施主体が国から地域へと移されるなか、さまざまな地域における福祉政策の展開について調査し、現状と問題点を探りました。こうした地域福祉研究を進める最中、山口大学への赴任が決定したのです。

現在の研究テーマ：遠距離介護とワーク・ライフ・バランス

アイデンティティからケアへ、そして地域福祉へと研究テーマを広げてきた私が、現在追いかけているのは、遠距離介護です。このテーマには、男女でのケアと労働の分配について、また、地域福祉やワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）など、さまざまな問題が絡み合っています。仕事を持つ男女労働者が離れて暮らしている老親のケアと自分の仕事を両立し、お互いに安心して暮らすことのできる社会は実現可能なのか、そして可能にするためにはどのような社会政策が必要なのかについて、現在研究を進めています。

私にとっての研究は、自分が日々の生活の中で感じている疑問を解決するための手段であり、社会の進むべき方向を考えるためのツールです。今後も、生活者意識を大切にしながら、研究に取り組んでいきたいと考えています。

学内連絡先

TEL : 083-933-5569

E-mail : nabeyama@yamaguchi-u.ac.jp

URL : <http://ds0.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~nabeyama/>

私の授業



田浦 保徳

大学院連合獣医学研究科長

教授

農学部 獣医学科

ポニ子：動物とのコミュニケーション

農学部附属動物医療センター(YUAMEC)の坂を登ると左手にパドックがあり、白いポニーが近寄ってきます。獣医学科1年生の獣医学概論の一環として、大動物を飼育しています。獣医学概論は、新入生対象に、獣医学科教員全員が、自分の専門科目や研究等について紹介する授業です。その中で、私のタイトルは、「動物丸ごと診られる獣医師をめざして」です。私は、平成新山のある島原半島の家畜商の孫として生まれた、いわば野人であります。中学生の時に獣医師になろうと決心し、体力をつける必要があるといってはレスリングや柔道ばかりしていました。実際は、小学2年時から働き続けた農作業や家畜飼育からの逃避と、他の世界を見たいとの憧れから、クラブ活動に集中したのでした。大学の教員になった時も、私のような土や糞にまみれ、動物と寝食を共にして来た唯の田舎者が、果してアカデミックな世界でやれるのかと不安でした。しかし、今はそれらの動物飼育の経験が、私の専攻した臨床獣医学にとっては、非

動物丸ごとを診られる獣医師を目指して

常に大切であるような気がします。

臨床獣医学は、より高度な診断技術を用いて、自然発生の症例を診査し、その中から特異的な生体反応等を取り出して、基礎獣医学分野にフィードバックしてきました。症例の中には、二度と遭遇できないようなものが多く、人では作り得ない疾患に会えた時や、治療に反応してくれた時の感動は相当なものであります。この20~25年間の獣医学の進歩は目覚ましく、広く生物学に貢献してきました。その理由の一つに、動物学のスペシャリストとして動物を丸ごと診ることができる教育をしてきたからだと、私は思います。

7年前の獣医学概論で、「動物丸ごと診るには、丸ごと知るべきであり、飼育経験は重要です」と言ったところ、学生から「動物を飼いたい」との希望が出てきました。ポニーは、とても警戒心が強く臆病で、力強くではコミュニケーションが取りにくい動物です。当初、自分よりも大きいポニ子に恐れ、どうしたら意思伝達が出来るかと不安がっていましたが、3~4名体制での1年間の飼育が始まりました。期間中、病気や逸走などの問題も生じましたが、自らあるいは教員と共に問題をクリアし、学生の愛情溢れる飼育にポニ子も理解を熟成させ、学年末には、信頼関係が生まれてくるようです。飼育方法や病気、調教方法等についても、学生自らが「問題意識を備え、やる気が出てくる」のがよく解ります。

いい獣医外科医の三箇条 : S. K. Ho

臨床獣医学分野の中で、4年次前期から授業科目「獣医外科学総論」、「獣医外科学各論」、「獣医外科学実習」、また3年次から「獣

医放射線学Ⅰ」・「同実習」、「獣医放射線学Ⅱ」・「同実習」、及びYUAMECや野外での「臨床実習」を開講しています。その中で私が、重視しているのがSKHoです。ゴルファーのSKホさんとは無関係です。

①技術 (Skill) : やはり最も大切です。日々の努力や訓練により育まれた技術がないと自信をもって手術に臨めないと思います。脳外科では出血すると血の海になりますので、予防的止血と出血しても慌てない気力と止血する技術力が必須です。また、技術力の上昇は目に見えるし、自分自身の努力を評価し易いので、スランプになった場合には、昨日よりも違った技術を身につけることが、脱出の早道かもしれません。

②親切 (Kindness) : 患者に対してとても大切なことです。親切に気遣うことで、患者も医師も諦めない気持ちになれるし、ポジティブな考え方へと意識改革ができそうな気がします。患者は個々に違うので患者に適した治療法を常に考えてやる優しさは大切です。

③正直・誠実 (Honesty) : 患者や自分自身に正直であることは、嘘がないので、結果的には疲れないし、強くなれると思います。不誠実や嘘を言うと、それらを維持するために大変な労力や知力が必要かもしれません。情報公開が基本の医療現場では、正直者が最も強いと思います。嘘は露見するものです。ばれた時に誰が責任者であるかが明白な時は、最初から正直に情報公開した方が、泥沼には入らないと思います。

学内連絡先

TEL・FAX : 083-933-5928

E-mail : yaura@yamaguchi-u.ac.jp

教員から寄せられた著書



纏纏厚著『いまに問う 憲法九条と日本の臨戦体制』（凱風社 2006年11月発行）

纏纏厚著『「聖断」虚構と昭和天皇』（新日本出版社 2006年12月発行）

昨今、日本国憲法の「改正」をめぐる議論が活発となっています。改憲か護憲か、あるいは加憲か創憲など、憲法自体の再定義まで含め、そこには戦後日本政治の総括という課題が含意されています。しかし、こうした議論のなかで、明らかに欠落しているのは、現行憲法のなかでも第九条に関わる歴史認識です。拙著『いまに問う 憲法九条と日本の臨戦体制』は、憲法九条が形骸化されていくなかで、その反作用として顕在化著しい日本の軍事社会への道を「臨戦体制」のキーワードによって明らかにしようとした評論集です。この2、3年の間に筆者が国内だけでなく韓国や台湾で行った憲法問題や米軍再編に絡む安全保障問題などをテーマとした講演をベースにしたもので、そこでは憲法九条が、アジア民衆との和解に不可欠なツールであり、共生の根拠となり得ることを強調しています。拙著は、『図書新聞』（第2808号・2007年2月3日）などで大きく取り上げられるなど、新たな議論を喚起することになりました。

『「聖断」虚構と昭和天皇』は、アジア太平洋戦が昭和天皇及びその側近による「聖断」によって

幕を閉じ、敗戦による戦前国家の全面的解体を回避し、戦前権力の戦後への温存と復権の機会を用意するために実行された高度な政治選択であったことを、これに関わった人物が残した日記や手紙などの第一次資料を精査することで明らかにしようとしたものです。聖断は、ただ単に戦前権力の戦後への移行に成功しただけでなく、戦後の保守政治の精神的支柱としての象徴天皇制の政治的役割の根拠ともされていきます。日本社会の保守化や国家主義台頭の現状を解く鍵としても、拙著は様々な問題関心を引き出しています。そのことは本書の出版後、わずか3週間で増版が決定し、現在3刷となっていることにも示されているように思います。

本年は日中全面戦争（1937年）開始から70周年の年です。これに関連する日中戦争関連史や昭和初期に関わる研究や出版が多く企画されると思われます。筆者もこれに関連する本を執筆中ですが、混迷を深める日本と中国や韓国などアジア諸国との過去を清算し、歴史和解の方途を探りだし、安定した共生関係を築くために、歴史研究が果たす役割は重大だと認識しています。

纏纏 厚 教授 人文学部 人文社会学科
TEL : 083-933-5278 E-mail : koketsu@yamaguchi-u.ac.jp



関連知識を高めて深く読む 頻出テーマ別 英語長文の徹底攻略 vol. 1, 2, 3, 4

（山根和明編著 アラン・クリスト英文検閲 文英堂 2006年6月発行）

この度、出版しました大学入試用の「テーマ別英語長文の徹底演習」は6年前くらいに出したもののが全面改訂版です。前回のものはかなり評判が良くて全国の高校500校以上で使用されたということでしたので、勇躍気合を入れて作りました。

この問題集の特色は、今の高校生は現代的教養に欠けているようなので、まず、オールラウンドな知識をつけて英語を攻める、というスタイルをとっていることです。入試に頻出するテーマを分

かりやすく、面白くエッセイ風に語り、その後同じ内容の入試問題長文を出題する、というもので（問題はほとんど独自に作り変えました）。これだと、推測して読み進めることができるのでより早く、的確な解答が得られると思うのです。同時に、オールラウンドな知識が付くわけですから、AO・推薦入試での面接、小論文にも効果を發揮する、というのが狙いです。解答に英語風直訳と模範訳をつけたのも特色です。

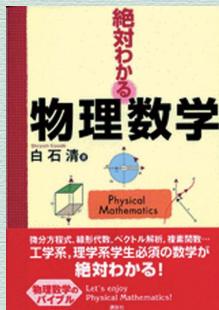
山根 和明 准教授 経済学部 企業会計講座
TEL : 083-933-5568 E-mail : yamane.k@yamaguchi-u.ac.jp



教員から寄せられた著書

『絶対わかる物理数学』

(講談社サイエンティフィク 2007年3月1日発行)



ちょうど1年前に発行された、『絶対わかる力学』、『絶対わかる熱力学』、『絶対わかる電磁気学』、『絶対わかる量子力学』の姉妹編（絶対わかる物理シリーズ）です。大学1・2年生向けの参考書です。

偏微分、微分方程式、線形代数、ベクトル解析など、工学系・理学系学生必須の数学・・・言い換えれば、理工学系1・2年生が力学、熱力学、電磁気学、力学を勉強するときに「必ず必要になる数学」について取り上げ、丁寧に解説しました（高校数学の復習も含んでいます）。以前の4冊や、他の物理の教科書で説明が足りないところも、これで補えます。また、固有値問題、複素関数なども取り上げ、専門課程までの物理数学の全体像が見渡せるようにしました（ただし、フーリエ解析は割愛しました）。

前4冊と同様、見開き2頁の構成で解説しまし

たので、区切りが明確になっていて、予習復習に最適であるとお薦めできます。前4冊との違いは、式が多いため（数学なので当然）、文章と図を半々にすることをやめたことです。しかしこのおかげで、（数々のクレームもあった）活字が小さいという難点は解消され、かなり見やすくなつたと思います。あと新しくなった点は、キャラクターの足が長くなつたこと（笑）。

最近、理学部学生（数理科学科以外）の数学の理解度がはなはだよろしくないようです。どうも最近の学生は全く自習をしない模様です。この本も山大生にはちょっと難しいか？などと思うこともあります、価格もそこそこですので（？）、理系学生のみなさんが読んで勉強していただこうと希望します。

なお、「絶対わかる物理シリーズ」は、まだ続きます。

白石 清 教授 大学院理工学研究科 物理・情報科学専攻
TEL : 083-933-5681 E-mail : shiraish@yamaguchi-u.ac.jp

中世瀬戸内の流通と交流

(柴垣勇夫編 塙書房 2005年12月20日発行)



本書は平成15-19年度特定領域研究「中世考古学の総合的研究－学融合を目指した新領域創生」（領域研究者：中央大学文学部 前川 要教授）に関する公開シンポジウムの成果をまとめたものです。岩石学を専門とする私には全体を紹介できるほどの力量はありませんので、共同研究者と著した本書中の「滑石製石鍋の産地同定と流通」という一文についてだけ紹介します。

我が国における滑石製石鍋生産遺跡の発掘調査事例としては、唯一長崎県西海市のホゲット石鍋製作所遺跡（国指定史跡、以下ホゲット遺跡という）が知られていました。一方、1986年に山口県宇部市の下請川南遺跡で、石鍋の原石を切り出していた製作所跡が発見されました。ここに下請川南遺跡はホゲット遺跡に次いで確認された石鍋製作所跡となつたのですが、この遺跡を当時（中世）の石鍋の生産・流通体系の中でどのように位置づけるかという課題は、未解決のまま残されていました。

知人からこの課題についての共同研究をもちました。

けられ、岩石の顕微鏡観察や分析を進めるうちに、両遺跡の素材を識別する上で有効な指標を見出しました。まず、下請川南遺跡の試料には接触変成作用による直閃石が見られ、ホゲット遺跡の岩石とは化学組成が異なることがわかりました。これらの指標をもとに中国・四国地方の消費遺跡から出土した多くの石鍋を検討しました。その結果、ホゲット遺跡製作と考えられる石鍋は瀬戸内地域をはじめ、多くの遺跡から見出される広域流通品、下請川南遺跡のそれは遺跡を中心とした半径30-55kmの地域にほぼ限定される狭域流通品と考えられることが分かりました。このことから、当時、ホゲット遺跡製作の石鍋は長崎と瀬戸内地域、さらに東方との間で広く流通し、下請川南遺跡はおもに地域の需要に応える役割を担っていたことが想定できるようになりました。さらに西彼杵半島での生産を補完する役割もあったと考えられますが、そのあたりの事情については、現段階では明らかにできていません。



今岡 照喜 教授 大学院理工学研究科 自然科学基盤系学域
TEL : 083-933-5765 E-mail : imaoka@yamaguchi-u.ac.jp

平成19年度公開講座のお知らせ

講 座 名 ・ 講 師 名	受講対象者	開講期間	時間帯
「おくのほそ道」を読む 講師：藤原マリ子（教育学部教授）	市民一般	5/19、6/2、16、30、7/14	14:00～15:30
小麦栽培から始めるパンづくり 講師：高橋 肇（農学部教授）、嘉村則男（同技術専門職員）、徳永 豊（スリーヒルズアソシエイツ代表）、中司祐典（山口県農業試験場）	市民一般（成人対象）	5/30、8/22、11/7	10:00～15:00
市民のためのライフプラン講座 講師：石田成則（経済学部教授）、上津原 章（ファイナンシャルプランナー）	市民一般	5/26、6/9、23	14:00～16:00
プロの技術で挑む小麦栽培から始める地産地消のパンづくり 講師：高橋 肇（農学部教授）、吉見匡司（嘉川工業株式会社）、未成秀一朗（創作ベーカリー「shuj」店長）	過去に開催した「小麦栽培から始めるパンづくり」修了者	6/27	10:00～16:00
小・中学校教員のための英語・国際理解指導者研修会 講師：未定	小・中学校教員及びテーマに関心のある方	8/2～8/3	10:00～16:00
木工入門 講師：岡村吉永（教育学部准教授）	市民一般（小学生以上） ※小学生は保護者同伴	①8/10～8/12 ②8/31～9/2	8:30～13:00
理科実験講座 講師：池田幸夫（教育学部教授）ほか未定	小・中学校教員	8/22～8/23	9:00～16:15
安らかな終末期を過ごすために 講師：東 玲子（大学院医学系研究科教授）、齊田菜穂子（同講師）	市民一般	8/20～8/21	10:00～12:00
今日から始めるグリーンライフ講座 講師：高橋 肇（農学部教授）、執行正義・藤間 充・竹松葉子（同准教授）、荒木英樹（同助教）、嘉村則男（同技術専門職員）、長沢光治・谷口和也・井上敬之・高田 晓（同技術職員）	市民一般	8/31、10/5、11/30、H20.2/29	10:00～15:00
農山漁村での安らかな暮らしを願って、柿本人麻呂を祀る 講師：吉村 誠（教育学部教授）、高山宣道（八幡人丸神社宮司）	市民一般（成人対象）	9/29～9/30	13:00～16:00 10:00～12:00
生活習慣病とメタボリック・シンドローム 講師：谷澤幸生・坂井田 功（大学院医学系研究科教授）、藤井崇史（同准教授）、三浦俊郎（同講師）、梅本誠治（医学部附属病院准教授）、石原秀行（同助教）	市民一般	10/1、15、22、29 11/12、19	19:00～20:30
萩焼を生んだ山口の大地 講師：大和田正明（大学院理工学研究科教授）、澤井長雄・永尾隆志・阿部利弥（同准教授）	市民一般	10/13～10/27 (毎週土曜 計3回)	13:00～15:00
「現代の教育問題」を読み解く 講師：小川 勤（大学教育センター教授）ほか未定	教育関係者ほか	10/6、20、27、11/10、24、12/1	14:00～15:30
香りを科学する（防府会場） 講師：梶原忠彦（山口大学名誉教授）、松井健二・青島 均（大学院医学系研究科教授）、赤壁善彦（農学部准教授）	市民一般	6/2、9、17、24、30	13:30～15:00
温泉の話－山口県とニュージーランドの温泉を例にして－（防府会場） 講師：西村祐二郎（山口大学名誉教授）	市民一般	10/6～10/27 (毎週土曜 計4回)	13:30～15:00
やまぐちサタデー・カレッジ2007（異文化交流コース） 異文化理解の宗教学的アプローチ－聖なる表現の仕組み－ 講師：ジュマリ・アラム（人文学部准教授）	市民一般・学生	6/23～7/14 (毎週土曜 計4回)	15:10～16:40
やまぐちサタデー・カレッジ2007（外国語学習コース：英語） 英語に関する素朴な疑問について考える 講師：岩部浩三（人文学部教授）	市民一般・学生	6/23～7/28 (毎週土曜 計6回)	13:00～15:00
やまぐちサタデー・カレッジ2007（日本文化コース） 仏をめざす人々の物語を読む 講師：柏木寧子（人文学部准教授）	市民一般・学生	10/6～10/27 (毎週土曜 計4回)	15:10～16:40
やまぐちサタデー・カレッジ2007（外国語学習コース：フランス語） 「星の王子さま」をフランス語で読む 講師：井上三朗（人文学部教授）	市民一般・学生	10/6～12/1 (毎週土曜 計8回) ※11/3を除く	13:30～15:00

山口大学エクステンションセンター

〒753-8511 山口市吉田1677-1

TEL(083)933-5059 FAX(083)933-5154

E-mail:kyoutu@yamaguchi-u.ac.jp

・電話受付の場合：月曜～金曜 8:30～17:00 (土・日・祝祭日は除く)

お問い合わせ・申し込み

新聞掲載された山大・地域から見た山大

2月

◆ 産・学・官が討論会

パネリスト丸本卓哉山口大学長他
山口「07問題を考える」 (雄飛:1日)

◆ ネットで結び病理診断

大学病院 地方病院
山口大大学院と業者 新システム開発
(読売:2日)

◆ 「秋吉台」(代表・松村澄子助教授)と
「環境保全教育」(代表・藤島政博教授)
山口大理学部 ハイライト研究2件選ぶ
(毎日:2日)

◆ 山大の大学院生池田さん大賞に
キャンパスベンチャー中国
花粉サプリ開発 (山口:3日)

◆ 山口でピース・トーク・マラソン [本社など主催]
国際協力1人1人が力に
パネルディスカッション
宇佐見晃一山口大教授他 (山口:4日)

◆ 根強い職業の性別感
-人文学部日本語文化論コース4年中村恵梨さん-
パイロット ⇒ ⑨ 客室乗務員 ⇒ ⑩
医師・薬剤師など薄らぐ傾向も
山大生がイメージ調査 (読売:7日)

◆ 「がんに特化した医師などを育成を」
県庁で分科会初会合
岡正朗・山口大大学院教授を会長に選出
(読売・山口:7日)

◆ 山大は志願倍率低下 -国公立大2次-
6日現在 下関市大、県立大は増
(山口:7日)

◆ 工学部前期入試大阪会場を新設
08年度山大入試 (山口:7日、宇部日報:8日)

◆ シニア・カレッジ来月開講 -西京銀-
4大学協力初回は山大 受講生を募集
(山口:9日、中国:14日、雄飛:20日、読売:21日、朝日:読売:22日、山口:3月20日)

◆ 農学部獣医学科で学士編入学を導入
08年度から山大 (読売:9日)

◆ 県科学技術振興奨励賞
清水教授(山大)の研究に
産業振興賞には3件6人 (読売・山口:9日)

◆ 岩国出身漫画家 弘兼憲史さん
-山大客員教授に-

4月1日付「環境と生物」など講義予定

(読売:9日、毎日・山口:10日、宇部日報:15日、雄飛:20日)

◆ 複数の病変、一気に発見

8大学が診断支援システム
膨大なCTデータ基に 開発メンバーの
一人木戸尚治・山口大教授 (山口:11日)

◆ ビジネスプランオーディション

起業目指し熱く語る
山口大大学院 河本さんらに最優秀賞に
(読売・山口:11日)

◆ あの人この人 話題の人

-人文学部4年柳田由香里さん-
言葉の印象世代別に分析 (読売:12日)

◆ 蛾3種、草原で初確認

-山口大理学部-
ハイライト研究で報告 (西日本:12日)

◆ バイオディーゼル燃料製造

-宇部マテリアルズ-
山口大と触媒を開発
(宇部日報:15日、山口:27日)

◆ まんじゅう作りも -山口大-

21日「おもプロ」報告
(宇部日報:15日、毎日:20日、読売:24日、山口:25日、朝日:27日)

◆ 山大卒業・修了制作展始まる

-県立美術館で40点- (山口:16日)

◆ 連合獣医学研究科長に田浦教授

-山口大大学院- (中国:17日、山口:19日)

◆ 大規模災害時の医療を考えよう

きょう山口でシンポ (山口:18日)

◆ 女性医師家庭と仕事

-医学生ら対象 宇部でシンポ-
両立へ先輩ら助言
自分の価値観、夫の理解大事 (山口:18日)

◆ 中国内陸部の貧困を考える

-山大で東アジア国際フォーラム-
(山口:19日)

◆ 中央狙い精神統一

-弓道六大学定期戦- (読売:20日)

◆ まちづくり組織構想も

-山口まち大学会議-
3大学長、市長、会頭 連携へ意見交換
(山口:21日)

◆ 新入留学生応援生活用品を募集

-山口の交流会- (中国:21日、山口:27日)

- ◆ 山大の女子医学生 －県が結婚観アンケート
「出産後も医師を」8割超
育児支援望む声強く
(山口:21日・宇部日報:22日)
- ◆ 花粉症抑制の食品開発
－加藤昭夫山口大名誉教授－
原因たんぱく質抽出 錠剤状に (読売:21日)
- ◆ 山大が大学憲章を発表 (読売・山口・毎日:21日)
- ◆ 愉快な日本語講座 ▼15
－人文学部教授・添田建治郎氏－
山口県の大田さん、全員集合
太田さんより多数派 (中国:24日)
- ◆ 山大新技術 企業にPR
来月9日、東京で説明会
共同研究、実用化目指す (読売:25日)
- ◆ あの人この人話題の人
－山口大農学部助教授本道 栄一さん－
20年先見つめ制圧に挑む (読売:26日)
- ◆ 山大で受験倍率3.2倍
国公立大2次試験始まる
(山口・読売・朝日・毎日:26日)
- ◆ 空手で海外“武者修行”
農学部4年元空手部主将
橋本さんエルサルバドルへ
代表チーム指導 国体での活躍も期す
(毎日:27日)
- ◆ 山大留学生に生活の足支援
山口LC、自転車贈る (山口:27日)

3月

- ◆ 中韓「日本は悪いことした」
日本「すべて戦争の被害者」
山大大学院の纏纏ゼミ学生
若者対象に歴史認識調査 (山口:2日)
- ◆ 「る言葉」を研究
－山大大学院留学生・鄭さん－
告る ポコる 退治る
江戸時代までさかのぼる
2900人にアンケ 歴史、使用頻度を調査
(読売:2日)
- ◆ 新「長州五傑」海外へ
－第一陣は4人－
山口大工学部研究者を育成 (読売:2日)

- ◆ 卒業制作20作品赤れんがで紹介
山大工学部感性デザイン工学科
(山口:3日)
- ◆ 愉快な日本語講座 ▼16
－人文学部教授・添田建治郎氏－
「そうはイカの・・・」は迫力満点
言い返すときどうぞ (中国:3日)
- ◆ 「ちゃぶ台」教育理解を深めて
－山大でフォーラム－ (山口:4日)
- ◆ 「食品添加物の知識を高めて」
－山口で農業フォーラム－ (毎日:5日)
- ◆ 野生動物からの感染症制圧へ
－日台シンポー
10日 ペット飼育など身近な対策も
山口大研究代表本道栄一助教授
(読売:7、11日)
- ◆ 山口の文化財を守る会講演会
－人文学部真木隆行助教授－ (読売:7日)
- ◆ 『あったー』笑顔舞う
－山大で合格発表－ (朝日・毎日・読売:9日)
- ◆ 堂野教授が今春退官 －山大教育学部－
臨床心理士として活躍
17日山口で最終講義 (読売:9、18日)
- ◆ 山大吹奏楽部銀賞の音色披露
樂器不足乗り越え全国大会に
きょう山口で定期演奏会 (読売:10日)
- ◆ 山大・県立大後期日程実施 －国公立大2次－
(山口・読売:13日)
- ◆ 産学公で山口ブランドを
－農学部松富直利教授を会長に選出－
県食品開発推進協が設立総会 (山口:15日)
- ◆ 30万年前の噴火くっきり地層に
阿武と萩の境で発見
－大学院理工学研究科永尾隆志助教授－
県が保存検討 (読売:15、16日)
- ◆ 教え教えられ巣立ち
山口の生雲小 大学生と交流
大切な思い出胸に (毎日:22日)
- ◆ 第44回読売農学賞 受賞者決まる
丸本 卓哉山口大学長他7人選出
(読売:19日)
- ◆ 現役社長成績優秀者に －山大大学院終了式－
「学び生かし強い会社へ」(読売・毎日:21日)
- ◆ 山口大でも2452人が卒業 (山口:21日)

- ◆ (学) ゾウリムシは宝箱
-大学院理工学研究科藤島政博・研究特任教授
人の病気治療役立つヒントぎっしり
24種2500株飼育中 (読売:27日)
- ◆ 山口老年総合研究所・顕原賞
山大・奥野教授らに (山口:30日)

4月

- ◆ 仕事も育児も女性医師支援
山口県医師会が部会 (中国:3日)
- ◆ 弥生人の生活学ぼう -山大埋蔵文化財資料館-
県内外の遺跡から出土 土器、石器など展示
(読売:3日)
- ◆ ほめ言葉にもお国柄
-山大大学院・楣村さん調査-
① 親しみやすさ好感
② まじめさを評価 (読売:4日)
- ◆ 新生活スタート
山大2767人が入学式 (読売・中国・山口:4日)
- ◆ 初産の女性夢分析
-山口大名島潤慈教授が研究-
心の奥底解明 ■ 家族の理解促進、
虐待防止も期待 (読売:4日)
- ◆ おくのほそ道読む・英語の疑問考える
-山大で公開講座- (山口:10日)
- ◆ 留学生62人に生活応援グッズ
山口大で市民が贈る (山口:11日)
- ◆ 下関市北西部と地形など条件酷似
能登半島地震現地調査
山口宇部有料道路とも共通点
山大院調査グループ「教訓生かした備え」
(読売:12日)
- ◆ 再生やまぐち ——教育
特色なしは“負け組”
大学全入時代 ④ 留学促進など運営工夫
(山口:13日)
- ◆ 大学病院はいま
-山口大学病院の先進救急医療センター-
最後の砦 命つなぐ限界に挑戦
(西日本:14日)

- ◆ 交尾相手 地位より新顔 -山口大調査-
ニホンザルの雌
受胎可能時期 多様な遺伝子求める?
(読売:17日)
- ◆ 山口大大学院MOT
広島教室を開講 技術開発と経営2年履修
(中国:19日)
- ◆ 山口大の丸本卓哉学長
日本農学賞を受賞
微生物で緑化技術開発
(山口:19日、読売:26日)
- ◆ 山本山口大院教授日ごろの活動を生かし
石川・輪島市の全11小学校に
「地震に負けるな」防災の著書贈る
(毎日:24日)
- ◆ 山口大医学部研究グループ
文科大臣表彰科学技術賞
大動脈瘤薬物療法に道 (朝日:27日)
- ◆ 山大マンドリンクラブスプリングコンサート
(サンデー山口:27日)
- ◆ 山大公開講座
ライフプラン講座 (サンデー山口:27日)
- ◆ ■日本語教える知識学ぶ■
-山口大人文学部 林 伸一教授-
5月から山口・宇部で講座 (読売:27日)
- ◆ あの人この人話題の人
-山口大農学部獣医学科助教藤田 志歩さん-
人と動物共存の道探る (読売:30日)

お 知 ら せ

第36回七夕祭

今年は、七夕当日の7月7日（土）に山口大学吉田キャンパスで〈第36回七夕祭〉を開催します。

七夕祭は、山口大学の寮生が企画する七夕を飾る各種イベントが計画され、例年大盛況で、みこしを担いだ男たちがキャンパス内を走り！夜はちょうどちんが点灯され七夕のムード満点！恋人達に大人気です！

学生を中心にいろいろな模擬店があり、山口市内一番を誇れる楽しい祭りです！

皆様是非とも7月7日は七夕祭へ！



学生手作りのみこし（平成18年）

●開催日時 平成19年7月7日（土）15時～

●開催場所 山口大学吉田キャンパス（山口市吉田1677-1）

●イベント 15:00～17:00 ビンゴ大会（理学部前ステージ）

17:30～19:30 サークルの出し物（理学部前ステージ）

18:00～ みこし（吉田キャンパス内）

19:00～ 提灯点灯（吉田キャンパス内）

20:00～21:00 実行委員1年生による企画ステージ（理学部前ステージ）

●その他のお知らせ

七夕祭Webページ <http://tanabatasai.michikusa.jp/>

オープんキャンパス

●開催日時 平成19年8月7日（火）人文・教育・経済・理・農学部

平成19年8月8日（水）医・工学部

●開催場所 8月7日（火）山口大学吉田キャンパス（山口市吉田1677-1）

8月8日（水）医学部：山口大学小串キャンパス（宇部市南小串1-1-1）

工学部：山口大学常盤キャンパス（宇部市常盤台2-16-1）

●対象者 高等学校生徒、保護者等

●内容 教育活動の紹介、各学部での説明、研究室訪問、実験・実習体験、入試相談、学生による相談コーナーなど

●申し込み 事前予約が必要です

詳細は決定次第Webページ(<http://www.yamaguchi-u.ac.jp/>)でお知らせします

●オープんキャンパスに関するお問い合わせ先

学務部入試課 083-933-5168

デジタル山口大学

山口大学の大学活動を紹介する番組として、山口ケーブルビジョン（株）12chで毎月1日から15日15:30～15:45に放映しています。サービスエリアは山口市、防府市、宇部市、美東町です（平成19年5月現在、一部地域を除く）。

放送中の番組及び過去に放送した番組は、山口大学Webページでもご覧いただけます。

【URL】 <http://ds21.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~www-yu/digiyama/index/>

●6・7月の番組予定

6月1日(金)～15日(金)「進め！工学部!!」

7月1日(日)～15日(日) オープンキャンパスについて特集（予定）

●ご意見・ご感想をお寄せ下さい

E-mail sh011@yamaguchi-u.ac.jp

編集後記

若葉の新緑も色鮮やかに映え、力強い生命の息吹を感じる今日この頃です。

皆様におかれましては、新年度を迎えたな期待と思いを胸に心弾む日々をお過ごしと存じます。

本号の特集テーマは“法人化4年目を迎えて”とし、学長先生および副学長先生方に、それぞれのお立場から法人化後3年を振り返り、今後の進むべき方向についてご執筆いただきました。また、山口大学憲章の制定にあたり、その思いについて記していただきました。

そこから見えてくるのは必ずしも明るい展望だけではなく、大学を取りまく厳しい環境です。今まさに山口大学のあり方が問われています。山口大学憲章に掲げられている“山大スピリット”をもって、学生・教職員一人ひとりが新たな希望と夢をもてる山口大学を創造する時期かと思います。

そのためには、皆様のお知恵やご意見が必要です。多くの皆様のお知恵とご意見をお待ちいたしております。そして、このYU Informationが皆様の声をつなぐ情報の一つになることを願っています。

(塩田 正俊)

◎山口大学Webページ <http://www.yamaguchi-u.ac.jp/>

山口大学広報第八十三号

平成十九年五月三十一日発行

編集発行 山口大学広報戦略委員会

(総務部 総務課)

住所：山口市吉田一六七七一

電話：(083) 933-5007

FAX：(083) 933-5013

E-mail sh011@yamaguchi-u.ac.jp

印刷：コロニー印刷

広報戦略委員会委員

平田	井上	富永	三池	近久	長畑	利部	浜本	武藤	宮田	河野	塩田	平野	福田	福田	村田	（企画広報担当副学長）
博教	重巳	倫彦	秀敏	博志	実	聰	義彦	正彦	雄一郎	真治	芳信	(人文学部)	(教育学部)	(教育学部)	(人文学部)	(企画広報担当副学長補佐)
(事務局)							(農学部)	(医学部)	(理学部)	(経済学部)						

(大学教育機構)
(大学情報機構)
(アドミッションセンター)

※次号は7月31日発行予定です。(5月・7月・11月・3月の年4回発行予定)